

草の芽句会たより

NO,94
28,6,2

実梅洗ふうぶ毛に水のころがりし
青梅雨の中マニキュアで出かけたる
文子

賑やかに子供広場の運動会
カサブランカの花に埋もれ別れゆく
節子

万緑をまといて御座すお城かな
咲きのぼる立葵の赤事務所跡
純子

別院の大屋根焦がす夏夕日
クローバの木陰とび出す孫二才
範子

睡蓮や気づけば鷺の消えてをり
城に座す見るもの全て夏に入る
禮子

歩を止めて青葉の風に吹かれけり
群れ咲けるしろつめ草に風渡る
剋子

一声の夏鶯の交差点
さわさわと揺れる木漏れ日杏の実
貞子

咲きそめしより色移りゆく四葩かな
新緑の枝差し交わす窓に空
貞

出席者 大黒 馬場 吉崎 氏家 森 小山
投句者 真鍋 川原

新緑に覆われた城山は眩いばかり。爽やかな風、鳥の声、夏草の小さく青い花。睡蓮は静かに咲き、傍らにアオサギが動かない。木々の影を映して濠の水も緑である。青空に両手を広げて深呼吸をする。城山の初夏は訪れる人にたくさんの元気を与えてくれる。しろつめ草の広場では園児らが手をふり足を上げ運動会の練習に一生懸命。先生方も大声で拍子をとりに一緒に踊る。思わず拍手をしてしまった。まもなく梅雨入り、季節は巡る。今年も元気で暑さを乗り切ろうと言い合って散会となった。

